様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０１２０９

研究課題名（和文）現代社会における移動性と場所性をめぐる都市人類学的研究

研究課題名（英文）Urban Anthropological Study on Mobilities and Placeness in Contemporary Society

研究代表者
大橋　健一（OHASHI, Kenichi）

立教大学・観光学部・教授

研究者番号：７０２６９２８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、グローバル化する現代社会における移動の常態化と越境的生活圏の多方向的拡大がもたらす諸問題に対し民衆が生み出す文化創造の実態を、移動/定着、グローバル/ローカルが錯綜する「場所」＝都市で研究し、地球規模の移動時代を生きる人類にとっての移動性と場所性の相互連関に関する動態社会モデルとして析出するため、現代世界の移動のホットスポットであるベトナムを研究の戦略的結節に設定し、その移動のメカニズムを日本・アジア・アフリカ・旧ソ連を軸に多方向的に調査・分析した。研究からは、多方向性をもつ移動の重層化によって現代都市社会が複合的・動態的に構築される「場所」として成立していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、総論的、一元的な議論の傾向のあるグローバル化について、移動のメカニズム、移動者の生み出す共同態、「場所」構築の各様態の多元性を複合的な分析を通して都市人類学の現代的再構築への寄与を試みた点に重要な学術的独自性と意義をもつ。現代社会の多方向的・多元的移動の動態を複数の移動軸から実証的に研究することで固定的な地域研究枠組を相対化し、移動性とその結節としての都市＝場所性の相互連関を関係系として把握したことは、従来のグローバル化論に支配的な単純な南/北軸、中心/周辺軸を超えたグローバル化の動態解明や多元的現代都市社会の構成主体としての移動者の人間的理解への寄与として重要な社会的意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：This research aims to clarify the reality of cultural creation by the people in response to the problems caused by the normalization of mobility and the multi-directional expansion of cross-border living spheres in today's globalized world. In order to extract a dynamic social model regarding the interrelationship between mobility and placeness in urban social context for human beings living in an era of global mobility, this research set Vietnam, which is a hotspot for mobility in contemporary world, as a strategic node, and investigated and analyzed the mechanism of the mobilities from various directions with Japan, Asia, Africa, and the former Soviet Union. From the research, it became clear that contemporary urban society is established in a complex and dynamic manner as a "place" constructed by multi-directional and multi-layered mobilities.

研究分野：都市人類学

キーワード：都市人類学　都市　移動　場所　グローバル化　越境　ベトナム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

現代社会における移動性の加速化とそれに伴う越境現象の拡大化は、文化人類学の領域においても多くの関心を集め、「グローバル化の人類学」として議論されてきたが、「共同性/流動性」「場所/非-場所」などの比較的単純な対比図式に基づく議論に陥る傾向もあり、克服すべき課題として指摘されてきた。本研究が方法的基盤とする都市人類学は、文化人類学研究の中にあって早くからグローバル化に関わる議論を蓄積してきた領域であり、都市がそもそも移動の結節として異質な人々の出会いと相互作用の場であることを考えれば、都市人類学においてこそ移動と越境を促すグローバル化現象が対象化されることは必然であり、グローバル化の帰結として目されることの多い都市への単純な「非-場所」概念の適用を相対化する議論を深化させる方法的可能性を都市人類学は持っていると言えるものの、社会全体が都市型化する現代社会において「都市」という問題構制がいかなる現代的意義を持ちうるかは未だ検討の途上にある。このような状況を踏まえた上で、本研究は、従来のグローバル化論が前提としてきた「中心/周辺」「南/北」間の対立図式を想定した移動の捉え方を相対化し、多方向的で、多元的な移動の動態を具体的かつ実証的に解明する必要を認識した上で、研究の理論的戦略としてあえて固定的な地域研究枠組を相対化し、移動性に着目した「関係系」として研究フィールドを捉える必要を認識したため、現代世界における移動のホットスポットとして多方向的移動の結節となっていながら、このようなアプローチを採用した議論がほとんどなされていないベトナムに着目し、多方向的で多元的な移動の動態を具体的かつ実証的に解明することにした。

２．研究の目的

本研究は、グローバル化の進む現代社会における移動性の加速化・常態化とそれに伴う越境的な生活圏の急速かつ多方向的な拡大がもたらす諸問題に対する民衆的な生活戦略と共同態構築が生み出す文化創造の実態を、都市という「移動/定着」「グローバル/ローカル」がせめぎ合い、錯綜する「場」において調査・分析し、地球規模の移動時代を生きる人類にとっての移動性と場所性の相互連関に関する動態社会モデルの理論化を図ることを目的とする。

３．研究の方法

グローバル化の進む現代社会における移動性の加速化・常態化とそれに伴う越境的な生活圏の急速かつ多方向的な拡大が、移動の結節である都市においてどのような移動者相互の共同態を生み出し、場所性をどのように創出させているかというテーマを多元的・複合的にフィールドワークに基づいて解明し、動態社会モデルとして理論化するため、以下の方法によるインテンシブなフィールドワークを実施した。

⑴　現代社会におけるグローバル化現象を多元的に把握するためグローバル化の現代史的展開を作動させている諸力としての「コロニアリズム」「ソーシャリズム」「グローバリズム」に着目し、これら諸力の相互連関過程としてグローバル化とそれに伴う多中心性、多方向性をもつ移動性を捉える。

⑵　上述の諸力の重層化による現代史的帰結として現代世界の移動のホットスポットとなっているベトナムを研究の戦略的結節として設定する。

⑶　結節としてのベトナムを介して展開する多方向的・多元的移動の動態を従来のグローバル化論に支配的な「南/北」軸を超える日本・アジア・アフリカ・旧ソ連地域という異なる移動軸から複合的かつ具体的に調査し、これらの移動軸で展開する移動現象に直接・間接に反映するグローバル化を作動させる諸力の相互連関の動態を分析する。

⑷　具体的調査においては、移動性と場所性の相互連関を主題とした都市人類学的アプローチに基づき、グローバルレベル・国家レベル・都市レベル・ストリートレベルという研究次元を想定しながら、移動者の共同態創出と「場所」構築が具体的に生起するストリートレベルから都市・国家・グローバル社会を重層的に捉えるパースペクティブを採用する。

４．研究成果

⑴　本研究において、現代社会で展開する移動が多方向性・多元性をもつ動態の中にあることがベトナムを結節とした日本・アジア・アフリカ・旧ソ連地域という複数の移動軸における移動の実態に関する具体的な調査から多面的に解明された。このことは現代のグローバルな移動の結節としてのベトナムからのベトナム人の地球規模での旺盛な移動の実態からも明らかとなり、今日留学や出稼ぎといった様々な回路を通じたベトナムからの移動のメカニズムは、地方の村

落レベルにも深く浸透し、移動を促していることが明らかとなった。そして、そのような移動は、従来の移動メカニズムモデルが想定していた単純な村落→都市→国外といった一方向的で段階的な移動を超える動態を示している。また、単純にベトナムが発地で国外が着地という単発性の移動によって移動が完結するのではなく、多方向的で多様な移動の連続性が存在することが本研究の事例から析出された。例えば、ベトナムから韓国への労働移動は、さらに日本への移動と連続している。一方で、ベトナムへの多様な移動軸を通じた移動もまた同様の性質を有している。ベトナムへの移動者もまた本研究で注目したアフリカや旧ソ連地域をはじめ世界各地に深く浸透した移動性に促され、多方向的で多様な経路を介してベトナムへ移動し、さらにまたベトナムを経由してさらなる移動を連続させている。これらベトナムからの移動とベトナムへの移動の両者が交差することにより移動の結節である都市はこれまで以上に社会・文化的錯綜性を高度化していることが解明された。

⑵　移動の加速化と常態化がもたらす社会的・文化的錯綜性の高度化は、移動者の生み出す様々な新たな共同態のありようを顕在化させている。移動者の視点から捉えた場合、現代の移動者にとって SNS ネットワーク構築が重要性を有し、ベトナム人出稼ぎ労働者や留学生のコミュニティが SNS を通じてネットワークを構築し、それを駆使した共同態を生み出していることを本研究は明らかにした。また、アフリカ出身の移動者たちがアフリカ社会の日常的行動様式として習慣化してきた即時的社会関係形成力が彼らのグローバルな移動においても重要性を発揮し、ベトナムをはじめとする移動先での共同態形成のありように寄与していることを明らかにし、栗田和明が「Frequent Traveler」概念によって論じたアフリカ人の旺盛、頻繁な移動による「仮の共同体」形成理論をさらに発展させることができた。他方で、移動者の生み出す新たな共同態を地域的視点から捉えた場合、本研究は観光による移動者のためのインフラやサービスの集積によって商業的、産業的に構成される観光エンクレーブの社会的構成の分析を通して商業性や産業性を介して構築される共同態のありようを明らかにした。ベトナム・ニャチャンにおける観光エンクレーブにおいてはロシア語を媒介とした観光経済システムがロシアからの観光移動の受け入れを支えると同時に、そのような観光経済システムが旧ソ連のロシア語圏各地から観光セクター労働者や起業家のニャチャンへの移動を促し、ロシア語によって媒介される観光文化空間をニャチャンにおいて出現させている。観光が地域において重要な意味をもつ観光都市ニャチャンにおいては、このような観光エンクレーブは移動者を受け入れるホスト社会に対して必ずしも自閉的ではなく、ホスト社会もまたロシア語を媒介として観光エンクレーブとの回路を接続し緩やかな共同態を形成している。このような自他混成による地域形成の構造は、本研究におけるアフリカ・カメルーンのドアラや韓国・ソウルの梨泰院における移動者受け入れによるコミュニティ形成の研究事例からも析出された点であり、移動性に特徴づけられる現代社会における動態的地域社会モデルとして理論化できる。

⑶　従来に増して移動性によって大きく特徴づけられる現代社会において、都市は上述のような移動者が生み出す新たな共同態が投影された「場所」として構築され、現象化している。移動性の増大によって社会・文化的錯綜性を高度化している都市は、その場所性において単純な移動者の伝統的共同態の持ち込みによって一元的に構成されるものではない。むしろ、移動の多方向性・多元性が生み出す多文化的混淆性に特徴づけられた新たな場所性を生み出している。そして、このような移動性を前提とした多文化的混淆性によって特徴づけられる「場所」としての都市は、さらにそのような新たな場所性を求める多くの移動者を惹きつけることになる。結果として、このような移動を前提とする場所性によって特徴づけられる都市は、具体的な「場所」に立脚しながらも地球規模の拡がりをその内部に帯びたものとなる。本研究における調査研究事例から導かれたこれらの知見は、鈴木栄太郎による古典的都市理論を拡大発展させ現代的理論として再定位させる方向性を示すものとなったと言える。すなわち、本研究によって明らかとなった現代都市の移動性と場所性の相互連関は、グローバルな越境的移動の日常化によって鈴木が構想した都市の生活構造理論の拡大を要請し、地球規模の移動を織り込んだ都市における生活地区論を構想・設定する新たな都市の理論化を提示することに寄与した。

⑷　2020 年以降の新型コロナウイルス感染症の世界的流行及び 2022 年 2 月以降のロシア・ウクライナ関係の破壊的悪化は、本研究の進捗にも具体的な直接的影響を及ぼしたが、これらの地球規模での社会政治的状況の大きな変化は、本研究が対象とするグローバルな移動にまさに直接的な影響を与える重大な変化であり、研究開始当初は予期しなかった状況のもとでの様々な知見をもたらすことになった。2020 年に本格化した新型コロナウイルス感染症の世界的流行拡大は、地球規模での移動が加速化・常態化する現代社会が経験したことのない大規模な移動の停止をもたらした。しかしながら移動制限の緩和が始まるとともに移動は再開し、地球規模での移動の加速化・常態化自体は依然として継続拡大の趨勢にあることが、本研究の各調査対象において確認された。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の世界的流行が一段落し、移動制限の緩和が始まった矢先に、ロシア・ウクライナ関係が破壊的に悪化したことにより、感染症流行とは別の形での移動の制約と新たな移動が同時発生し、グローバルな移動をめぐる政治的要因の重要性が改めて浮き彫りとなった。このような近年のグローバルな移動をめぐる二つの大きな危機的状況双方の影響をまさに直接的に最も受けた本研究における対象事例が、観光というパン

デミックに対する脆弱性の高い移動に大きく規定され、しかもロシア・ウクライナ関係の影響を直接受けるロシア語圏旧ソ連地域との移動軸に枠づけられているベトナム・ニャチャンである。このことは単なる偶然ではなく、本研究が現代の移動性を分析するための理論的戦略研究対象として着目したベトナムがまさに現代世界をめぐる最前線の社会政治状況の影響を強く受ける現代社会のグローバルな移動のホットスポットであることを改めて証明することになった。これら二つの大きな危機的状況の影響について本研究で取り組んだニャチャンにおける調査からは、①パンデミック以前までのロシア語圏旧ソ連地域とニャチャンの間の移動を大きく特徴づけたマスツーリズムの停止とそれに基づいたロシア語を介した観光経済構造の崩壊、②ニャチャンの観光セクターにおけるロシア語話者の再移動・帰還、③ロシアにおける政治的危機状況からの一時避難者という新たな移動者の到着によるニャチャンにおける移動者の性質の変容（マスツーリストから長期一時滞在者へ）、④観光エンクレーブの空間構造変容、⑤ニャチャンにおける新規観光市場としての中央アジアの勃興による中央アジアからの観光移動者の急増とロシア語を媒介とする観光文化インフラの中央アジア市場への転用、などが明らかとなった。さらにこのような移動をめぐる変容は、①中央アジア出身の観光セクターにおけるロシア語話者の本国への帰還による中央アジアを中心としたユーラシア空間における観光分野へのノウハウ移転と起業の促進、②中央アジアとベトナムを結ぶ社会経済的交流空間の拡大、といったユーラシア地域における新たな社会経済的インパクトの可能性を析出した。

⑸　以上のように、本研究は、現代社会の移動の多方向性・多元性を示し、移動の結節としての都市をめぐる移動性と場所性の相互連関を動態社会モデルとして多面的に提示した。このような本研究の成果は、移動が加速化・常態化し、社会全体が都市型化する現代社会において、「都市」という問題構制の現代的意義を改めて問い直し、都市人類学の現代的再構築への寄与を試みた点で国内外への大きな学術的インパクトをもつと考えられる。また、本研究がベトナムというフィールド＝場所性に立脚しながらもそれを移動性のハブとして位置付け、現代社会の多方向的・多元的移動の動態を複数の移動軸から調査分析したことは、固定的な地域研究枠組を相対化した新たな研究方法論の提示に貢献した。さらに、本研究が具体的・実証的に提示した現代社会の移動性の動態は、従来採用されてきた「移住」や「観光」の固定概念化を乗り越え、現代の移動性に関する概念上の批判的再検討と新たな概念的可能性の探求を促した。このように本研究は、単に都市人類学研究にとどまらず、都市研究、地域研究、観光研究、移民研究などより広範な領域への波及力を有する研究枠組や概念の再検討に関わる多くの問題提起を含む成果を示すことができた。本研究が提起した研究枠組や概念に関する諸課題の再検討がこれら関連領域との連携の中で行われることによって、現代社会における移動性と場所性の相互連関をめぐる動態の解明はさらに深化するものと展望される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計20件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　13件）

１．著者名 和崎春日	４．巻 17
２．論文標題 高英求の流動性理論とアフリカ‐フィールドワーク認識論の照応と交響	５．発行年 2022年
３．雑誌名 貿易風　(中部大学国際関係学部論集)	６．最初と最後の頁 18-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 和崎春日	４．巻 13
２．論文標題 アジア-アフリカ混濁の奔流 - 梨泰院に湧出するアフラシア世界	５．発行年 2023年
３．雑誌名 なじまあ	６．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長坂康代, Malik Allah Yar Khan	４．巻 32
２．論文標題 新潟におけるイスラームによる他者包摂と相互扶助―ホスト・ゲストの役割交換による互酬性の成立について―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 敬和学園大学紀要	６．最初と最後の頁 87-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 和崎春日	４．巻 16
２．論文標題 移動アフリカ人の動棲共創の論理－在ベトナムアフリカ人サッカー選手の生活原理	５．発行年 2021年
３．雑誌名 貿易風（中部大学国際関係学部論集）	６．最初と最後の頁 34-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 長坂康代	4．巻 31
2．論文標題 グローバル化に向かう出稼ぎベトナム人の労働実態―黎明期の村落出身の海外労働者とロンビエン卸売市場の運搬者のライフヒストリー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 敬和学園大学研究紀要	6．最初と最後の頁 61-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 OHASHI, Kenichi	4．巻 Vol.1 No.1
2．論文標題 Migratory Trajectories of Russian-speaking workers in the tourism sector of Nha Trang (Vietnam)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 DEMIS. Demographic research	6．最初と最後の頁 64-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19181/demis.2021.1.1.7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 和崎春日	4．巻 -
2．論文標題 現代アフリカ・カルチャーの現在地	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ウスビ・サコ、清水貴夫編『現代アフリカ文化の今』青幻舎	6．最初と最後の頁 21-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 和崎春日	4．巻 -
2．論文標題 道端這いから世界を生きるストリート都市力―アフリカ生活力の都市人類学	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ウスビ・サコ、清水貴夫編『現代アフリカ文化の今』青幻舎	6．最初と最後の頁 42-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長坂康代	4．巻 30
2．論文標題 ベトナム・ハノイの米食文化に関する文化人類学的研究―ホーチミン市での北部コミュニティとヌン族との比較による考察	5．発行年 2021年
3．雑誌名 敬和学園大学紀要	6．最初と最後の頁 43-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 長坂康代・Do Van Kien・Nguyen Thu Thuy	4．巻 19
2．論文標題 台湾都市域におけるベトナム人コミュニティの創成―ハイズオン省からの労働輸出とSNSネットワーク構築を中心として―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 敬和学園大学年報	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 和崎春日	4．巻 60-1
2．論文標題 スポーツ領域で交流進むアフリカ‐東南アジア関係―ベトナム・プロサッカー界におけるアフリカ人選手の活躍	5．発行年 2020年
3．雑誌名 AFRICA	6．最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長坂康代	4．巻 -
2．論文標題 ベトナム人同郷者間の相互扶助に関する国内と台湾の比較-社会政策に随伴する同郷会の動態について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 和崎春日編『響きあうフィールド　躍動する世界』（刀水書房）	6．最初と最後の頁 371-390
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 和崎春日	4．巻 14
2．論文標題 開放的文化継承と解放的コミュナリティ生成―カメルーン最大都市ドアラの街並保存と京都「大文字」に通じるもの	5．発行年 2019年
3．雑誌名 貿易風（中部大学国際関係学部論集）	6．最初と最後の頁 36-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 和崎春日	4．巻 176
2．論文標題 テンベアとダンイスカ―移動アフリカ人の放浪と定住の論理	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊民族学	6．最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　6件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 OHASHI, Kenichi
2．発表標題 Vietnamese Migrants in Okinawa and their Geopolitical Implications.
3．学会等名 3rd International Scientific Conference “Migration Processes in the Asia-Pacific Region: Migration and Development in the New Geopolitical Realities”（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 OHASHI, Kenichi
2．発表標題 Geopolitics of Vietnamese Labor and Educational Migration in Okinawa.
3．学会等名 Mahidol Migration Center 6th Conference on “From New Normal to the Next Normal: Migration Research and Policy in the Changing World”（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 OHASHI, Kenichi
２．発表標題 Transformation of Russian-Speaking Tourism Mobilities in Vietnam
３．学会等名 International Conference on "New Migration in Eurasia: Consequences for Integration Processes"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 長坂康代
２．発表標題 若者ベトナム人の日本での生存戦略―東海地域在住者の生活動態を中心として―
３．学会等名 東海社会学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大橋健一
２．発表標題 ”Socialist Mobilities”とベトナムの都市・建築
３．学会等名 東京理科大学ベトナム建築研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 OHASHI Kenichi
２．発表標題 Migratory Trajectories of the Russian-speaking Workers in the Tourism Sector of Nha Trang, Vietnam.
３．学会等名 XI International Scientific and Practical Forum “Migration bridges in Eurasia: New approaches to the formation of migration policy on behalf of the sustainable development”（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

1．著者名 長坂康代，岩井美佐紀　他55名	4．発行年 2023年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 440
3．書名 現代ベトナムを知るための63章	

1．著者名 長坂康代	4．発行年 2023年
2．出版社 刀水書房	5．総ページ数 500
3．書名 ベトナム首都ハノイの都市人類学	

1．著者名 和崎春日、長坂康代、鈴木裕之、中野紀和　他37名	4．発行年 2020年
2．出版社 刀水書房	5．総ページ数 830
3．書名 響きあうフィールド　躍動する世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	和崎　春日 (WAZAKI Haruka) (40230940)	中部大学・国際関係学部・客員教授 (33910)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	長坂　康代 (NAGASAKA Yasuyo) (00639099)	敬和学園大学・人文学部・准教授 (33104)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ロシア連邦	ロシア科学アカデミー　連邦理論・応用社会学研究センター 人口学研究所	モスクワ国際関係大学		
ベトナム	ベトナム国家大学	ニャチャン大学		